

俳句 大津俳句会

啓蟄やまだ眠さうな団子虫

井芹真一郎

大方は女ばかりや若布干す

家入元子

梅林に偲ぶ師の声友の声

市原初女

耕や余生遊ばす鳥ありて

江藤みち

梵鐘の一打一打に開く梅

岡崎浩子

色きわめ石の隙間に咲く菫

坂本セキ

金鈴子ぼとりぼとりところと

高見ヒサ子

踏み込めば慌てふためき地虫出づ

原田順子

日脚伸びちよっぴり増えてきし余白

武藤規子

生きるとは手探りのみち蟻の道

森山美穂子

木の芽みな祈る形に出でにけり

渡邊佳代子

俳句 つのはな句会

なまぬい風土木が好きで河豚好きで

星永文夫

鉄を打つ鍛冶屋のリズム春きどす

木庭杏子

やわらかき棘持ちち少女ら卒業す

上杉波

ゴスペル流れて梅は散りいそぐ

岩本慶子

だまし絵の出口を隠す忘れ雪

矢嶋道子

南海に吞まれし御魂春寒し

水野春子

紫のカリフラワーが吉をよぶ

梅木トキエ

あたたかや子らの遊びの中に居る

塚本洋子

阿蘇は雪コーヒーで一息あったまろ

布山妙子

自分史は二枚で足りるまだら雪

志賀孝子

ゼブラゾンにあつまるPM2.5

田上公代

短歌 大津短歌会

踏みて行く落葉の下に夫を待つ

虫の暮らしの有るを思えり

波辺佐代子

風折れの水仙手折り瓶に挿す

部屋は忽ち春の香に満つ

岩下文代

拘わりて洗いし夫の白足袋の

春陽の中にひととき映える

坂本保子

何故に流るる涙ぞ打ち鳴らす

大津太鼓の腹に泌さとき

吉永恵子

生かされて八十路迎えるこの年も

気負うことなく生きて行きたし

豊岡ミツル

藪椿かたき蕾を開きたり

迷うこと無く真紅の花を

小平善行

短歌 万年青短歌会

立春に一輪咲きし梅の花香り

かすかにただようごとし

今村光子

春らんまん待つには遠し桜木の

蕾は堅し北風の中

河北幸一

亡き御師の歌集捲れば師の姿

今あるごとく貧り読みぬ

合志妙子

おひたしにせむと求めし菜の花を

分けて咲せし朝をたのしむ

長野和子

汗と涙を分けあいて来ぬ

鹿毛馬と共に働きし百姓は

山内信子

あれこれのオモチャにさわりしたしかむる

幼き孫の目輝きて

甲斐年子

冬晴れの夕陽けだかく輝いて

枯野の大阿蘇くつきり迫り来

吉田良子